

## 「百首歌」考―歌題と本意―

新庄 真実

### 一 はじめに

和歌史上、題詠が確立し本格化するのは平安末期の院政期であり、この題詠中心化の現象と絡むのが、この時期に百首歌が基本的な詠歌方式になるということである<sup>1</sup>。百首でひとつの完結した小世界を作り出す百首歌は、題詠の本格化をもたらし、歌題の規範化、題の本意の成熟化を進めた。

この、題詠意識の深化や題の本意の定着の問題と深く関わる百首歌に関して、松野陽一<sup>2</sup>と深津睦夫<sup>3</sup>にその形式と歌題の変遷をまとめた論考がある。松野は、平安末期の百首歌について、完本が存在せず、散佚してしまっている資料も対象に含めて四季・恋・雑のすべての部立の歌題について論じており、この時期に百首歌という詠作形態がようやく一般化し、歌題の組織等については基本的な類型が出揃った段階であるとしている。

深津は松野の後を受け、最後の勅撰和歌集である『新続古今和歌集』編纂の際の応制百首である『永享百首』成立（一四三三年）までを範囲として百題百首について調査し、百題百首は新古今和歌集成立後の建保期に新たな型の組題に一変することを指摘している。

本稿では、こうした先行研究を受けて、本意追求の行われた場として、組題百首の祖である『堀河院御時百首和歌』（長治二〜三（一一

〇五〜六）年）と、その番いである『永久四年百首』（永久四（一一一六）年）<sup>4</sup>を基軸とし、院政期から、二十一番目の勅撰集である『新続古今和歌集』の成立までに催された百首歌を対象に、どのような形式の百首歌があるのか、また、そこで取捨選択された歌題はどのような変遷を辿ったのか、その過程を、題の本意の定着の問題と関わらせて探っていきたい。

### 二 百首歌に関する先行研究

右に述べた通り、平安末期の百首歌の特色がよく整理されたものとして松野の論考が、そしてその後の『六百番歌合』以後の百首歌を整理したものとして深津論文が挙げられる。本項では、それらの論考をもう少し詳細に整理しておきたい。

松野は、『堀河百首』・『永久百首』成立直後の天承年間（一一三二〜二年）から元暦（一一八四〜五年）に至るまで、つまり新古今時代以前までの百首歌について、計四十五例の百首歌を取り上げ、四季・恋・雑のすべての部立の歌題について論じている。そして、それらを複数歌人によるものと個人詠のものに分類し、さらに部立・歌題組織などの形式により分類した上で、それぞれの形式ごとに、この時期の百首歌の特色について考察している。

その形式による分類は、まず、題の指定の有無によって「組題百首」と「非組題百首」とに大別し、その下位分類としてそれぞれ、「少数題百首・百題百首」と「無題百首・部立百首」とを設けている。また、「組題百首」の下位分類である「少数題百首」はその歌題数によって「十題百首」と「二十題百首」に、「百題百首」は歌題組織によって「複合題百首」と「素題百首」にさらに分類されている。

少数題百首の内の十題百首は、「鶯・梅・桜・郭公・七夕・月・紅葉・雪・恋・雑」のように十題が設題され、一題十首ずつ詠むものである。例に挙げた歌題配列のように四季部に重点を置くものと、四季部を「花・郭公・月・雪」のみにして恋・雑題に重きを置くものがある。二十題百首も同様ではあるが、十題百首よりも歌題数が多いため、より細かい組題の工夫ができる点から案出されたものと考えられている。

これら少数題百首は、当時、複数歌人による百首歌、つまり、歌会場で催される百首歌の披講形式が十首会積み重ね形式であったことに適合した組題として、特に十題百首は最も流行した。また、二十題百首の形式をとる『九条兼実十度百首』は、「後鳥羽院の公的百首に採用される条件設定の淵源となった」とされる。

百題百首は、一題につき一首を詠む形式のもので、その内の複合題百首は「山路桜」「関路惜月」のように二つ以上の事物を結び付けた題によって詠まれているものを指す。これに対して素題百首は「桜」「月」のような単一の題によって詠まれているものを言う。素題百首はすべて堀河百首題をそのまま詠んだと考えられるものであることが指摘され、個人詠では当代で最も普遍的な百首だったとしている。一方、複合題百首はこの時期に入ってからかなりの頻度で催された型の百首であるとし、歌題構成は、「為忠後度百首」を除き、すべて堀河百首

題を基本に、一部永久百首題も用いて題を構成していることを指摘する。そして、「組題の性質としての変化は新しい素題の組み合わせの方向に行くのではなく、複合題にしてゆく方向で工夫され」、「それだけ堀河百首題の規範性というものが強く意識されていた」と述べる。

非組題百首のうちの、部立百首は、「春20首・夏15首・秋20首・冬15首・恋10首・雑20首」のように、大枠としての部立とその歌数が指定してあるもので、少数題百首に近いが、歌題の限定がまったくない点が異なる。そして、この部立というゆるやかな条件設定は、作者毎に自由な腕を振るえる場を提供しているとされる。しかし、新古今時代以前では『久安百首』と定家の『初学百首』のみにこの形態が見られ、『久安百首』による公的性格が強かったためか、この時期には一般化していないという。けれども、少数題百首に後鳥羽院の公的百首に採用される条件設定の淵源となった例が見られたように、この部立百首もまた、文治以降の主要百首会に採り入れられて基本形となっていることも指摘している。

無題百首は、題も部立もないもので、述懐百首・恋百首・法文百首など単一主題による百首も形態上は含まれるが、新古今時代以前では無題百首はみられず、単一主題の百首は多く詠まれたようである。

以上の各形式に関する考察から、この時期に百首歌という詠作形態がようやく一般化し、歌題の組織等については、まださほど複雑多岐に分化することなく、次代、つまり、新古今時代における「様々な表現上の可能性追求の試みを容易なもの」とするための基本的な類型が出揃った段階であるとしている。

深津は松野の後を受けて、文治年間（一一八五～一一八九年）の百首歌から最後の勅撰和歌集である『新統古今和歌集』編纂の際の応制百首である『永享百首』成立（一四三三年）までを範囲として調査し

ている。そして、百題百首は新古今和歌集成立後の建保期に「中世型組題」と呼ぶべき、『堀河百首』とは異なる新たな型の組題に一変することを指摘している。そして、この「中世型組題」は、新古今和歌集の歌題配列と驚くほど一致するということが、堀河百首題と比べると、歌題の種類は集約傾向にあることも指摘し、それまでの組題の伝統とは直接的にはつながっていないとしている。ただし、深津は調査対象を、句題や名所題を除く百題百首形式の、ほぼ完本として現存している資料に限っているため、松野の調査範囲の時期より後の時代において、他の百首形式についてはどのような様相を呈しているか明らかでない。

この深津の言う「中世型組題」は、定家、家隆、慈円ら新古今歌人、それも新古今和歌集の撰集作業に直接関わった中心歌人によって詠まれ始めたと考えられることから、『新古今集』の影響を強く受けて確立したというのには確かに首肯できる。しかし、右のように調査対象外としたものがあるということを考えると、それまでの組題の伝統とは直接的にはつながっていないとすることに對しては、疑念が残る。

### 三 百首歌の総体―百首歌のリストと四季部歌題一覧―

こうした先行研究を受け、その実態を確認するため、特に新古今時代以後について、歌題の変遷をみることに、百首歌の総体を把握することを目的として、百首歌のリストを作成し、歌題があるものについては四季部に限ってその歌題を一覧にした。以後、論点を四季部に絞ることとする。深津も先掲論文中に述べているように、恋や雑、特に恋部は後々まで多様な歌題構成がなされ、一定しない。そのため、規範が早くに確立した四季部に限る方が、「題の本意」という問題が明確に浮かび上がると考えられる。

百首歌のリスト作成にあたり、調査範囲は、松野、深津両氏の調査範囲に倣い、下限は『新統古今和歌集』成立までとした。両氏に倣うと、上限は堀河永久両百首成立以後となるが、百首歌の総体を知りたい目的から、いわゆる初期百首の段階も含めた。調査対象は、『新編国歌大観』の第四巻、第十巻所収の「定数歌Ⅰ・Ⅱ」及び第三巻、第四巻、第七巻所収の「私家集編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」である。

項目として、作品名、成立年代、春・夏・秋・冬・恋・雑の各部立内の歌数の内訳、百首歌の形式、及び作者についてを一覧にした。百首歌の形式については、前項の松野の分類を参考にしたが、松野が対象とした時期には見られなかった歌題構成をもつものもあり、それらには適宜名称を与えた。

このように調査し、計百九十七例をリスト化した。そのリストの簡略化したものが左の一覧表である。作品名、成立年代、形式を一覧にし、個人詠のものには作品名に※印をつけ、作者名を記した。また、初期百首と組題百首との境界、松野、深津両氏の調査範囲の境界を二重線で、建久期、元久期、建保期をそれぞれ一重線によって区切り、時代区分を示した。

作品名	成立年代	形式
※好忠百首和歌	天徳末年(996)頃	初期百首
※(源順)百首和歌	天徳末年(996)頃	初期百首
※(重之旨)	不明(重之若年時の詠作)	初期百首
※(師氏百首)	不明	初期百首
※(惠慶法師百首)	不明	初期百首
※(重之女百首)	不明	初期百首
※(和泉式部百首)	不明	初期百首

※(相模) 走湯百首(1)	治安(1022)正月	初期百首	※(後惠) 百首	不明	百題百首(堀河題)
※(相模) 走湯百首(2)	治安(1022)四月	初期百首	※(後惠) 百首	治承(1178)以前力	(複合題)
※(相模) 走湯百首(3)	治安(1022)カ	初期百首	※(俊忠)後百首	治承(1178)以前力	不明
※千類集所収百首	永祿(990)	初期百首	九条兼実十度百首(右大臣家百首)	治承(1178)	二十題百首
堀河百首	長治(1105・6)	百題百首	※(慈円) 述懐百首	安元(1176)～治承三年(1179)三月	無題百首
永久百首	永久四年(1116)	百題百首	白河殿女房百首	治承三年(1179)以前	百題百首カ
為忠家初度百首	長承三年頃(1134)	百題百首(複合題)	※(定家) 初字百首	(養和元年(1181))	部立百首(久安百首)
為忠家後度百首	保延元年頃(1135)	百題百首	※(皇太后)宮大進百首	壽永元年(1182)以前	百題百首(複合題)
※(俊成) 述懐百首	保延六～七年(1140～1)	百題百首(堀河題)	※(賴輔) 述懐百首	壽永元年(1182)以前	無題百首
※(六条院)百首	不明	百題百首(ほほ堀河題)	※(広言) 百首	壽永元年(1182)以前	百題百首(堀河題)カ
崇徳院初度百首	保延六～七年(1140～1)	百題百首(堀河題)	※(長方) 百首	不明	不明
久安百首	久安六年(1150)	部立百首	※(寂蓮) 百首	壽永元年(1182)以前力	十五首存(同一百首か不明)
久安百首(忠感)	久安六年(1150)	部立百首	※(親感) 百首	壽永元年(1182)以前	百題百首(堀河題)
崇徳院句題百首	仁平元年以前(1151)	百題百首(句題)	※(忠度) 百首	壽永元年(1182)	百題百首(纏鼻刑)
※(公重) 百首	保元元年(1156)	無題百首(述懐)	※(定家) 堀河院題百首	壽永元年(1182)	百題百首(堀河題)
師光百首(小野宮侍從百首)	永曆元年以前(160)	十題百首	※(鏝也) 月百首	不明	無題百首
※(寂信) 寄恨百首	永曆元(1160)～仁安元年(1166)	百題百首(堀河題)	※(鏝也) 恋百首	不明	無題百首
一条天皇百首	永曆二年(1161)	十題百首	※(鏝也) 古歌百首	不明	無題百首
仁和寺御室(覺性)百首	嘉心元年(1169)以前	十題百首カ	※(西行) 百首	文治成立説アリ(1185～90)	十題百首
法門百首	保元元年(1156)～長寛三年(1164)	百題百首(經典の句題)	九条兼実後度百首	治承二年(1178)～壽永元年(1182)	二十題カ
※(藤原隆房) 朗詠百首	1148～1209	百題百首(朗詠句題)	九条兼実結題百首	治承二年(1178)～文治三年(1187)	百題百首(寂蓮結題百首と同題カ)
後徳大寺美定百首	長寛二(1165)～承安二年(1172)	百題百首(複合題)	※(寂蓮)無題百首	文治(1183)初年頃・文治五年(1189)頃	無題百首(堀河題)
歌林苑十座百首	承安二年頃以前(1172)	十題百首	※(慈円) 堀河院題百首	文治三年(1187)以前	百題百首
※(慈円) 初度百首(續百首)	安元(1176)以前	無題(本来は有題)	※(慈円) 百首	文治二年(1187)前後まで	部立百首
※(西行) 恋百十首	承安末～治承初頃カ(1175～77)	無題百首カ			
※(清輔) 述懐百首	治承元年(1177)以前カ				



光明筆撰政家百首(内大臣家百首)	建保二年(1215)九月十三夜	複合題百首(やや変則的)
建保名所百首	建保二年(1215)十月	百題百首
※(慈母)秀歌百首草	建保二年(1215)	部立百首
※道家百首	建保二年(1215)冬	部立百首
後鳥羽院百首	建保四年(1216)二月	部立百首
※忠信百首	建保四年(1216)	部立百首
※十御門院百首	建保四年(1216)三月	百題百首
※(順德院)朗詠百首	建保四年(1216)八月頃	百題百首
文集百首	建保六年(1218)	百題百首(文集題)
※(寂身)文集百首	建保六年(1218)	百題百首カ
※(慈母)春日百首草	建保六年(1218)十一月～七年春	一部一題一～三首
※(慈母)難波百首	建保七年(1219)正月	無題百首
※(寂身)無題百首	承久元年(1219)	無題百首(部立)
※(慈母)賀茂百首	承久元年(1219)六月～二年	部立百首
※(慈母)八幡百首	承久二年(1220)頃	一部一題一～三首
四季題百首(二十五首題百首)	承久二年(1220)	二十五題百首
※為家一夜百首	承久二年(1221)五月以前	百題百首(複合題)
※(慈母)厭離欣求百首	承元二年(1221)十月十五日	無題百首
※(慈母)春日百首	承久二年(1221)～貞応二年(1223)	十題百首
※(寂身)名所百首	承久四年(1222)	百題百首(名所題)
※(寂身)四季題百首	貞応二年(1223)	百題百首
藤川五百首	定家：承久三年(1221)頃・元任元年(1224)・嘉禎三(1237)～四年頃(など諸説)	百題百首(句題)
※後鳥羽院遠島百首	承久二年(1221)～延応元年(1239)	部立百首
※長綱百首	不明(嘉祿二年(1226))	百題百首(恋・雜一部一題五百乃至十首)

※(如題)百首	不明	部立百首
為家卿家百首	寛喜元年(1229)	部立百首
※家隆家百首	寛喜年間(1229～31)カ	百題百首(複合題)
※(寂身)句題百首	寛喜二年(1230)	百題百首(複合題)
※(寂身)堀河題百首	寛喜二年(1230)	百題百首(堀河題)
洞院撰政家百首	寛喜二年(1230)～貞永元年(1232)	二十題百首
九条前内大臣家内々百首	貞永元年(1232)～カ	百題百首(複合題)
※順德院百首	貞永元年(1232)	部立百首
※(寂身)百首	寛元二年(1245)	部立百首
※(寂身)百首	宝治二年(1248)	部立百首
宝治百首	宝治二年(1248)	一部一題一～三首
※祐茂百首	建長八年(1256)(康元元年)	一部一題一～三首
※為家五社百首(七社百首)	文応元年(1260)九月～同一年一月	百題百首
弘長百首	弘長元年(1261)	一部一題一～五首
※(宗尊親王)弘長元年五月百首	弘長元年(1261)	部立百首
※(宗尊親王)弘長元年九月百首	弘長元年(1261)	部立百首
※(宗尊親王)百首	弘長元年(1262)	弘長百首題
※(宗尊親王)弘長元年十一月百首	弘長元年(1262)	二十題百首
※(宗尊親王)弘長二年正月百首	弘長二年(1263)	一部一題一～三首
※(宗尊親王)弘長二年三月百首	弘長二年(1263)六月	部立百首
※(宗尊親王)文永元年十月百首	弘長二年(1263)八月	部立百首
※(宗尊親王)百首	文永一(1265)～四年(1267)秋頃	部立百首カ
※為家徒然百首	文永五年(1268)	百題百首(複合題)
※(宗尊親王)文永六年四月百首	文永六年(1269)4月28日	部立百首
※(宗尊親王)文永六年五月百首歌	文永六年(1269)5月	部立百首

※(尊親王)文永六年八月百首	文永六年(1269)8月	部立百首
※(尊親王)文永八年七月百首歌	文永八年(1271)4月28日 文永八年(1271)7月	百題百首(複合題) 部立百首
※(雅有)百首和歌A	弘安元年(1278.9)	一部一題一〇五首
※(雅有)一夜百首	弘安元年(1278.9)	百題百首(複合題)
※(雅有)一夜百首	弘安元年(1278)秋ま <sup>り</sup>	部立百首
弘安百首	弘安元年(1278)秋	部立百首
※(龜山院)詠百首和歌	不明	一部一題一〇五首
※(雅有)堀河題百首	弘安元年(1278.9)	百題百首(堀河題)
※(雅有)堀河院後題百首	弘安元年(1278.9)	百題百首(永久題)
※(雅有)百首和歌B	弘安元年(1278.9)	百題百首(複合題)
※(雅有)名所百首	弘安元年(1278.9)	百題百首
※(安嘉備院)四條五百首	弘安二年(1280)春〜弘安四年秋	百題百首
※(兼鹿)百首	永仁六年(1298)秋	百題百首
※(後)一条院百首	乾元元年(1302)翌嘉元元年	一部一題一〇五首
※(冬)百首	嘉元元年(1303)	一部一題一〇五首
※(冬)百首	正安二年(1300)七月〜正和三年(1314)四月の春	一部一題二乃至五首
※(冬)百首	正安二年(1300)七月〜正和三年(1314)四月の秋	百題百首(雨中・雷雨題)
※(冬)百首	不明(1277〜1328)	百題百首(句題・藤川百首) 首の同題
文保百首	文保二年(1319)	部立百首
※(資)百首	元亨二(1323)・四年以前	部立百首
※(尊親王)一宮百首	元徳二年・元弘元年(1331)	一部一題一〇五首
※(尊親王)詠法華經百首	不明(1298〜1356)	品經百首(法華經各品に

北野社百首和歌	建武二年(1336)11月〜康永二年(1343)三月	百題百首(複合題)
※(尊親王)百首	貞和二年(1346)	部立百首
※(徽安)院一条集	貞和二年(1346)	部立百首(部立名なし)
※(足利)尊氏等持院百首	貞和二年(1346)秋	部立百首
※(一)系良基後善光園院百首	觀応二年(1352)八月	部立百首
延文百首	延文元年(1356)	一部一題一〇五首
大山祇神社百首和歌	応安八年(永和元年)二月二七日改元、1357)三月以前	百題百首(複合題)
※(頓)阿百首A	延文二年(1358)正月	百題百首(複合題)
※(頓)阿百首B	不明	部立百首
※(頓)阿百首	康安の頃(1361〜2)	百題百首(句題)
※(足利)義隆宝篋院百首	康安元年(1362)八月二十六日以前	百題百首(複合題)
※(慶運)百首	不明(1293〜1369)カ	一部一題一〇五首
隠岐高田明神百首	至徳四年(1387)六月	百題百首(三字題)
※(後)一条院御百首	応永十八年(1411)以前	百題百首(複合題)
※(耕運)雲窓贈語	応永二年(1414)頃	百題百首(句題・藤川百首) 首の同題
※(耕雲)百首	正長二年(1428)正月〜翌年七月頃	一部一題一〇五首
※(後)一条院重陽百首	永享五年(1433)九月	百題百首(複合題)
永享百首	永享五年(1433)	百題百首

さらに、リスト化した百首歌のうち、組題百首の歌題を、『堀河百首』と『永久百首』の歌題を基軸として成立年代順に並べて四季部歌題一覧<sup>8)</sup>としてまとめた。

以下、この百首歌のリストと四季部歌題一覧の分析を通して明らかになったことを述べていきたい。

#### 四 形式と歌題の変遷

##### 1 少数題百首

少数題百首については、松野の指摘にもあるように、『九条兼実十度百首』が二十題百首の正統として継承されているということが、『治承題百首』・『廿題百首』・『二夜百首』・『鳥羽百首』・『正治後度百首』からわかる。少数題百首の四季部歌題を一覧にした表を次に挙げる。

春							形式	代	成立年	作者
			桜		梅	鶯	十題	年以前	永暦元	師光百首
			花				十題	年	永暦二	二条天 皇百首
			花				十題	ゆ	安元初	初度百 首(藤原)
			花			鶯	二十題		治承年	兼実十度 百首
			花				十題	立	文治成	(西行) 百首
						霞	二十題	元年	治承二 立説	兼実後 度百首
			花				十題	年	建久元	一日百 首
	杜若			玉柳	梅花	朝霞	二十題		建久元	賦百首 百首
		曇羅			梅	霞	二十題	年	建久元	二夜百 首
			花				十題		建久九年	鳥羽百首
			桜			鶯	二十題		正治年	正治後度 百首
春			花				十題	二年	承久三 貞応	春日百 首
暮春			花			霞	二十題		寛弘二 貞永年	洞院政 家百首
		曇羅	春	花	梅	霞	二十題	年	弘長二	定家親王 百首

冬				秋						夏						
			雪			紅葉		月							瓢	
			雪					月							瓢	
			雪					月							瓢	
暮春			雪			紅葉		月			草花				五月雨 瓢	
			雪					月							瓢	
											夕			花橘		
			雪					月							瓢	
	埋火	小野原龜	初雪			楳紅葉				藤袴	花薄	女郎花		花橘	當夏	瓢
			氷		時雨	撞衣		鹿		霧				納涼	照射	
暮春			雪			紅葉		月								五月雨 瓢
			氷	雪		紅葉		月			草花					五月雨 瓢
冬				落葉		秋		鹿						夏	夏月	
			雪	氷		紅葉		月								五月雨 瓢
			雪		時雨	紅葉	秋夕	月	露							五月雨 瓢

『九条兼実十度百首』は、春「立春・鶯・花」、夏「郭公・五月雨」、秋「草花・月・紅葉」、冬「雪・歳暮」と設題されており、『鳥羽百首』『正治後度百首』と重なる歌題が多い。また、右の一覧表には含まれていないが、兼実の息子である良経と、その叔父の慈円の二名が建久六年以後に、それぞれ、『九条兼実十度百首』の題をそのまま踏襲して『治承題百首』『廿題百首』を詠んでいる。これらのことから、『九条兼実十度百首』の題が正統と意識されたと言える。

また、その『九条兼実十度百首』の題をあえて外すようにして、春「霞・梅・帰雁」、夏「照射・納涼」、秋「霧・鹿・擣衣」、冬「時雨・氷」と全く重なりを見せない題が設けられた『二夜百首』は、『堀河百首』の正統題と『永久百首』の変形題の関係になぞらえることができ、新しい歌題を開発しようとしている試みと言える。そして、『二夜百首』は建久元年に良経によって詠まれており、そのため、建久五年の『六百番歌合』において新たな歌題を開拓していくための前段としての試みとみることができる。この意味で『賦百字百首』も同様だろう。また、『鳥羽百首』は十題百首にもかかわらず、先に述べた通り、二十題百首の題と重なるため、各題の中でさまざまな歌が詠まれていることが予想される。それは、本意追求の新たな試みの一つといつてよいと考える。

## 2 百題百首

次に百題百首の形式を示すものについて考察する。

### (1) 組題の型

どのような組題の型を設定しているかという問題に目を向けると、松野・深津両氏がすでに指摘していることではあるが、元久年間（一二〇四）頃までは堀河題を素直に題にしているものが多く、個人百

首ほど堀河百首題をそのまま詠む傾向にある。この時期は、新古今歌人の初学期にあたり、堀河百首題が百首歌の規範であるという意識から、習作として詠むということがあったため、個人詠によるものにはこのような傾向が見られるのだろう。規範たる堀河百首題によって和歌の定型的な感性を自分の中に取り込むというような狙いがあったものと考えられる。

そして、建保年間（一二一三）頃から配列順序が大きく異なり、「花」「郭公」「月」「雪」を多く詠む集約傾向が見られたりと、少し変化が見られる。この変化に関しては、春の部立が最も揺れが少なく、夏の部立の変動が最も激しい。堀河百首題と一致しない題では、永久百首題と一部入れ替えているものが多くあり、これは松野の調査範囲の百首歌の傾向と同様である。しかし、中には永久百首題とも一致しない歌題があり、それらは『六百番歌合』の歌題と一致する場合が多い。したがって、新たな百首歌を詠む際に『六百番歌合』が歌題選択の新たな規範として位置づけられたといえる。

#### a 暦日意識・行事色を廃した歌題

そして、その『六百番歌合』の影響と考えられる変化が夏の部立に見られる。

夏は、『堀河百首』においては「更衣」に始まり「六月祓」で終わるといふ暦や行事色が強く表れていたが、『六百番歌合』では、「新樹」に始まり、「蟬」で終わるといふ、自然の景物によって夏の初め、終わりが描き出されている。このように、暦や行事色の表れない、「首夏」「遅桜」「余花」「夏聞鶯」のような題で始まり、「晩夏」や「秋近」といふような題で終わる百首歌がいくつか見られた。該当する百首歌を成立年代順に並べると次の通りである。

『後徳大寺実定百首』(長寛三(一一六五)承安二(一一七二)年)

「晚風似秋」

『百首句題』(成立年不明、慈円による)

「野草秋近」

『光明峯寺撰政家百首』(建保三(一一二五)年九月十三夜)

「首夏」

『順徳院』朗詠百首』(建保四(一一二六)年八月頃)

「首夏」

「晚夏」

『藤川百首』(成立年諸説、定家による)

「卯花隠路」

「行路夕立」

『長綱百首』(嘉禄二(一一二六)年か)

「原上余花」

「晚夏枕」

『家隆家百首』(寛喜年間(一一二九)か)

「遅桜」

『九条前内大臣家百首』(貞永元(一一三二)年頃)

「林早夏」

「晚夏」

『宝治百首』(宝治二(一一二四)年)

「首夏」

『国冬百首』(正安二(一一三〇)年七月)正和三(一一三二)年)

「首夏」

『一宮百首』(元徳三・元弘元(一一三三)年)

「首夏」

『頓阿百首A』(延文三(一一三五)年正月)

「首夏」

『頓阿句題百首』(康安の頃(一一三六)〜二)

『隠岐高田明神百首』(至徳四(一一三七)年六月)

「首夏風」

「深谷夏聞鶯」 「螢入定僧衣」

鎌倉末期〜南北朝に至って、再びこの傾向が見られるということも興味深いが、それよりも、『宝治百首』を除けば、建保年間から貞永元年まで、つまり、『新勅撰和歌集』の編纂期に至るまでにこの暦日意識や行事色を廃した歌題が見られることに注目したい。この時期は定家が歌壇の指導者として活躍していた時期と一致する。したがって、暦日意識や行事色を廃し、自然の景物によって季節の移り変わりを表そうとする傾向は、新古今歌人、特に定家の影響があったのではないかと考えられる。

#### b 季節の枠組を超えた歌題

さらに、歌題の変遷を歌の素材の面で見ると、季節の枠組を超えて設題されているものがある。

まず、『堀河百首』と『永久百首』の部立とは違う部立の題として詠まれているものがいくつかみられる。具体的には「夕立」が挙げられる。「夕立」は『永久百首』では秋の題として設題されているが、『六番歌合』から夏の題に組み込まれ、十三代集の頃の百首歌にはほぼ確実に夏の歌題となっている。「夕立」以外には、秋・冬の季節の変わり目で変動がある。「落葉」と「時雨」が冬の題ではなく秋の題になるものがあり、秋の題である「菊」が冬の題の「残菊」として、逆に冬の題である「霜」が秋の題の「秋霜」として組み込まれているものがある。このうち、「残菊」と「秋霜」は『六番歌合』に設題されて

おり、やはり、『六百番歌合』は後の百首歌の歌題選択に対して影響力を持つていえるといえる。しかしこれらは「夕立」のようにその後固定していくというのではなく、一部の百首歌に限られているため、本意として定着していくものではなかったようである。さらに、このような異なる季節に部類される歌題は、春の題には見られなかったことから、春の本意はある程度固定されているといつてよいだろう。

また、建保期になると、新古今歌人が各季節に「月」を詠み込むようになる。その早い例としては、各季節すべての月を題にしている慈円の「句題百首」、「春月」を題にしている定家の「藤川百首」がある。さらに、「月」題ではないが同様のものとして、各季節の「夜」を題にしている順徳院の「朗詠百首」もある。しかし、これらは建保期に新古今歌人によって唐突に詠まれ始めたものというわけではない。たとえば「朗詠百首」のように、漢詩句が題になっているものではこれらより早い時期からみられる。慈円・順徳院の百首も漢詩句を本として詠まれていることを考えれば、漢詩で詠まれていた「月」の影響によって秋の題であった「月」が春・夏・冬にも詠まれるようになったと考えられる。

このように、建保年間以前、特に建久年間に行われた、『六百番歌合』をはじめとする様々な試みのもとで本意追求が進み、建保年間以降は、建保年間に得られた歌題が多少の違いはあっても継承される、つまり、建保年間に区切りとして存するという事は確かである。しかしその組題の型は、突如として一変するのではなく、百題百首及び少数題百首の集合体としてできあがったようなものであり、組題の伝統と地続きのものであると言える。

## (2) 複合題の問題

組題の型に関連して、複合題の問題にも目を向けておきたい。複合

題については、歌論書等に見える「結題」がそもそもどのようなものを指しているのか、句題とは分ける必要があるのかなど、術語の定義自体が曖昧であるという問題<sup>10</sup>をもっている。しかし、藤平春男や田村柳壺<sup>11</sup>が指摘しているように、「結題」という語の用いられ始める時期より、「結題」の概念が成立したのは新古今撰集時代に近いころとされている。そして藤平は、このころは「結題」を「二つの概念の結合」と理解しているとし、このような理解が示されているのは、「題」となっている事物には本意が成立しており、結題は二つ（乃至二つ以上）の本意の結合だから<sup>12</sup>であると指摘している。したがって、複合題は二つ以上の本意の組み合わせによって新たな感性を歌に詠もうとするものであると考えられる。

このような複合題による百首は、新古今時代前史においては、かなりの頻度で催された型の百首であるとされていたが、文治年間（一一八五）頃から仲間内程度のやや小規模な歌会によって詠まれた百首歌では新古今前史同様、複合題にすることで題の新奇さを求める傾向にあると言える。

### 3 部立百首

また、松野の調査範囲ではまだ一般化していなかった部立百首は、文治年間頃から正式な晴れの場で催される百首歌において多く詠まれるようになっていく。そして、建保年間以降は、複合題によるものと部立百首が大半を占めるようになる。

題の制約のない部立百首が多くなるのは、歌人の力量が向上している、それに合せて配列意識にも工夫を凝らせるようにとの配慮があったのこともかもしれない。また、典型的な本意から抜け出そうという試みによって、新たな本意を求めていく、本意追求が為される場を提供

しているとみることもできよう。しかし、それは実際に詠まれた部立百首のそれぞれの作者の歌題が堀河・永久両百首と異なっている場合に言えることである。逆に言えば、『堀河百首』などによって各季節の本意が定着したために、わざわざ題を設けなくともそれぞれの歌人が、その規範に則って詠むということが可能になったと言うこともできる。そのため、部立百首がどのような歌題を想定して詠まれているのか<sup>13</sup>をみていく必要があるだろう。

## 五 おわりに

組題の型や百首歌の形式に関して、建保期を区切りに、『堀河百首』『永久百首』の歌題を継承する流れを脱していくという構造がみえた。そしてそこには、『六百番歌合』が歌題選択の新たな規範として加わっていることも見てとれた。この『六百番歌合』に代表される、建久期に行われた様々な試みのもとで本意追求が進み、建保期以降は、建保期に得られた題が多少の違いはあっても継承されており、しかもそれは、組題の伝統と地続きであるということも指摘できた。

冒頭でも述べたように、百首歌と題の本意の深化、規範化には密接な関わりがある。組題百首は、春夏秋冬の、よりその季節らしいものを求めて題を設定しているため、題を入れ替えていくということは本意を更新していくということ、ひいては感性そのものが変化していることの表れと考えられる。そのように考えると、この、組題の型に関して、建保期に得られた題が継承されていくことは、本意追求が建保期にとまってしまったことを表しているように見える。

しかし、建保期以後、百首歌の形式は、複合題と部立百首が大半を占めるようになっていた。したがって、建保期に至って、従来の百題百首形式、もしくは少数題百首形式の組題から、これらの形式の百首

歌に本意追求の場が移行したということが考えられる。そのため、この区切りとして存する建保期における百首の詠作、特に部立百首や複合題のものを取り上げて、歌題選択のみならず、歌の素材をどのように振る舞わせているのかを検討することが必要となるだろう。そうすることで、いまだ明らかにされたとは言えない建保期の和歌詠作の実態を紐解くとともに、本意追求の行われた場や方法の変遷をも明らかにすることができよう。

## 注

- 1 藤平春男「題詠」(『藤平春男著作集 第2巻新古今とその前後』第一章第二節、笠間書院、一九九七年十月)。
- 2 松野の百首歌に関する論考として①「平安末期の百首歌について」(『東北大学教養部紀要』二五、一九七七年二月) ②「組題構成意識の確立と継承―白河院期から崇徳院期へ―」(『文学・語学』七〇号、一九七四年一月)が挙げられる。本稿では①を適宜引用しつつ整理する。
- 3 深津睦夫「組題の世界―新古今以後を中心に―」(『論集〈題〉の和歌空間』和歌文学会編、笠間書院、一九九二年十一月)。
- 4 以下、それぞれ『堀河百首』『永久百首』という。『堀河百首』が勅撰集に則って構成する歌材を配列した正統題であるのに対し、『永久百首』は『堀河百首』との題の重なりを避け、行事色を色濃く出した変形題である。
- 5 「崇徳院句題百首」の恋歌の寄物題十首の別伝資料として、「讃岐院恋十首めしし時」(『貧道集』)とある。また、「歌林苑十座百首」も無名抄に「百首を十首づつ十座にのみて」とあるなど、十首単位で披講し、それを集成して百首にまとめたものとされる。
- 6 方法として、CD-ROM版を用いず、冊子を繰り、私家集については百首形態をとっていないものも詞書から判断し、リスト化した。しかし、どの百首に含まれるのか判断のつかなかった歌もあり、完全にこの調査範囲の百

首歌をリスト化できたとは言いがたい。とは言え、CD-ROM 版で再度検索するなどして、百首歌の総体が可能な限り明らかになるよう努めた。

7 具体的には、少数題百首の一種で、全部で二十五題の歌題をもつものがあり、これを「二十五題百首」とした。また、深津が指摘する「中世型組題」も含まれるが、集約傾向のある歌題組織については「一部一題二〜五首」などと記した。複合題とや、堀河百首題と一致するものはそれも示した。

8 具体的には、『堀河百首』と『永久百首』をそれぞれの配列順序は変えずに、季節の移り変わりに合わせて並べたものを軸として一致する歌題があれば○を、類似歌題には▲を付し、その歌題名を記していくという方法で作成した。さらに、ほぼ堀河百首題と一致する歌題構成をもつ百首歌題中には、組み込まれていない堀河百首歌題に×を付した。これに加えて、後に詳述するが、各季節の「月」題など、堀河永久両百首にはなかった歌題で、多くの百首歌に組み込まれていく歌題については新たに行を加えた。

9 各百首歌が十題百首か二十題百首かの別を形式の項に入力し、上から順に成立年代順に並べた。正治後度百首と春日百首の間で新古今集が成立するため、太線によって区切った。各百首歌内の配列順序は変えず、共通する歌題が同じ行に並ぶようにした。

10 「複合題」という呼称は松野の分類によるものである。井上宗雄<sup>(二)</sup>『心を詠める』<sup>(三)</sup>に『立教大学日本文学』<sup>(四)</sup>第三九号「一九七七年二月」は、松野の分類した「素題」と「複合題」を、「単純な題」と「複雑な題」とに分け、「複雑な題」の中には文章を成すものと成さないものがあることを指摘している。

藤平は両者の試案を踏まえた上で問題の整理をし、院政期以前の題詠意識の確立以前と以後では同じ「結題」の形式をとっていても性質が異なるため、分類としては松野に則るのがよいとしている。また、田村柳菴<sup>(一)</sup>「題」「結題」とそ<sup>(二)</sup>の詠法をめぐって」<sup>(三)</sup>（和歌文学会編『論集 和歌とレトリック』所収、笠間書院、一九八六年）も松野の分類に則った上で、歌論書や歌合判詞等における用例から結題が何を指すか、以下のようにまとめている。

平安末期に意識化された「結題」とは、堀河・永久両百首を契機として本意の確立した季題（素題）に、時間・空間乃至は情況（＝場面構想）を特定化する語を結合させ、一定のまとまった題意を形づくらせた題で、形式上は文章を成している場合と成していない場合との両様があり、題を構成している文字数は二字以上であるが、限定されることはない（ただし、「句題」の伝統を受け継いだ典型的な形式は四文字題）

12 注 1 論文。

11 田村柳菴「題」「結題」とその詠法をめぐって」（和歌文学会編『論集 和歌とレトリック』所収、笠間書院、一九八六年）。

13 『久安百首』は崇徳院によって催された最初の部立百首だが、藤原教長の家集「貧道集」には『久安百首』の詠作に、百題百首のように題が付されている。「貧道集」は自撰による私家集と考えられているため、この題も自らが付したと考えるのが自然だろう。ここから、歌人によって意識の程度差はあったかもしれないが、部立百首を詠む際にも、詠作する歌人の念頭には組題百首同様に歌題があったものと考えられる。

（兵庫県立神崎高等学校）